

NPO 法人 純正律音楽研究会会報 ～2020年11月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日 2020年11月6日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫

No.66



菊の香り漂う霜月を迎えましたが、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。前号で年内のコンサートは無理とお知らせいたしましたが、齋藤先生のご尽力で、ヤマザキパン様のご了解をいただき開催できる運びとなりました。

日程は12月26日土曜日午後2時開演、会場:ヤマザキパン「LLCホール」で、デュオで楽しむヴァイオリン「癒しの音楽コンサート」として開催いたします。出演は水野佐知香(ヴァイオリン)・荒井章乃(ヴァイオリン)・三宅美子(ハーブ)・森夕希子(ピアノ)です。

ただし100名様限定となりますので、なるべく早くご予約いただければ幸いです。

尚、来年は3月6日(土曜日)、市川のヤマザキパン「LLCホール」での開催を予定しております。

まだまだ新型コロナウイルスの感染者が減っておりません。皆様どうぞお気をつけてお過ごしください。

新型コロナの影響

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

長雨で急に寒くなったり、暑くなったり身体がついていくのに大変な毎日です。会員の皆さまお元気でいらっしゃいますか？

コロナ禍の中、コンサート活動も再開され、ほぼ日常が戻りつつあります。大学でもオーケストラの授業などソーシャルディスタンスに注意をはらいながら、毎週行われています。コロナが怖くて来校できない生徒たちにはライブ配信もしながらです。現在、世の中オーケストラは弦楽器は今まで2人で1台の譜面台を使っていたのを1人1台にして人数を減らして演奏をしています。また、飛沫が飛散ないように管楽器の前にはついたてをおいて、椅子と椅子の間1.5メートルあけて演奏をされることがとても多いです。

必ず座ったところ、譜面台なども消毒をして、コンサートでは、お客様が触ったであろうところまで全てトイレなども消毒をします。

先日9月6日には、横浜ミナトミライホールにて「元気になるコンサート・水野佐知香と仲間たち」が開催されました。計画したのがコロナで自粛期間真っ最中！本当にコンサートできるのかわからない状況でしたが、YouTube 配信をする前提で、横浜市から援助をいただき、皆様の協力で1/3のお客様のみでしたが、とても幸せな時を過ごすことができました。久しぶりに舞台上に立って拍手をいただいた時の感激、感動は、忘れられません！

やはり、お客様の力はすごいですね！感謝です。

純正律音楽研究会では、事務局長がFacebookなどに玉木さんのCDを投稿してくれていますが、12月にはやっと市川の山崎パンのホールでのコンサートが決まりました。昨年末、20年ぶりに再出版されたヴァイオリンデュオ曲集の出版記念コンサート以来、1年ぶりです。

100席限定です。素晴らしいホールで弾かせていただけること、今からとても楽しみにしています。

最近では、海外の先生とオンラインで繋いで大きなスクリーンに先生を映し出し公開レッスンも試してみています。先日は、オイストラフの一番弟子、ニューヨーク、ロチェスターにお住まいのオレグ・クリサ先生のご自宅とつないでのレッスンでしたが、すぐそこに先生が、まさにいらっしゃるようで、フィンガリング、ボーイングなど細やかにレッスンをしていただきました。

先生は、巨匠オイストラフの話やプロコフィフの話などたくさんしてくださり、とても有意義な時間を過ごすことができました。

コロナのおかげで経験したことがない自粛生活になりましたが、この時期を通して生きていることに感謝をして、精進しなければと思うこの頃です。眠っている玉木作品もご紹介していかなければ、、、！

デジタル放送への実験出演

NPO 法人 純正律音楽研究会 理事
ハーブ奏者 三宅美子

私はテレビを持っていません。もう何年になるのでしょうか？
旅先のホテルでもほとんど見ていません。スイッチを入れてニュースを見ても
コマーシャルも番組も正直あまり面白くないので消してしまいます。むかしは
テレビ大好き、ビデオも沢山録画してスピーカーを部屋の四方に配置して見て
いたのに。

引越しが趣味ですと冗談を言うくらい転居をしていた頃がありました。そし
てその度になにかしらの電気製品を取り替えていましたが、ある時テレビを新
しく買うつもりで、私のテレビを早々に友人に差しあげてしまいました。

SONY 吹奏楽団のお仕事も度々あり、団員の方々にどれが良いですかと尋ねる
と口を揃えて、もう直ぐデジタルになるからもう少しお待ちなさいと言われ、
次の演奏会でも、また次の機会にも言われ続けて、いつの間にかテレビのない
生活になりました。

尤もその頃は今とは全く比べられないほど忙しくて自宅でゆっくりとテレビ
を見る時間もほとんどありませんでした。テレビは旅先のホテルでつけっぱなし
にするだけのもの。好きだった映画のビデオテープも引越しの段ボールの中
に定住していました。

デジタルってなあに？という頃の思い出です。

その頃、昭和です。バブルと言われた頃、私も今よりずっとずっと若くて綺
麗で可愛かった時代です！

NHK の仕事でデジタル放送実験番組だと言われました。スタジオは確か六本木
のテレビ朝日だったかテレビ東京だったか？合同での実験とかで、外には何台
もの大きな撮影車が駐車していました。

メイクさんはいつも以上に緊張して丁寧に顔を塗ってくれました。
デジタル放送になると毛穴までハッキリ映ってしまうから、これから女優さん
たちはお肌の手入れが大変になると話していました。

ヴァイオリンの植村薫さんと一緒でした。薫さんがタキシードの様な衣装で
素敵な帽子をかぶったコオロギさん役。私はロングドレスに大きな羽を付けて、
というよりはヨイショと背負って蝶々さんの役です。

童話のようなお話の筋は覚えていませんが、ヴァイオリンを弾きながら中央
奥から薫さんが登場してきたシーンはとても素敵でした。私は上手側でハーブ
を弾きながら時々羽を揺らし優雅に座っていました。

途中、雷鳴が響き渡りライトが目まぐるしく変化して怖がる場面では立ち上がり背中大きな蝶の羽を大きく動かしたり小刻みに震わせたり、しっかり演技もしました。

お話も音楽も子供番組のようでしたが、とても面白い仕事でしたが、残念ながら多分、オンエアはテレビでは見なかったような、、、

現場のとても熱の入った勢いがあつた雰囲気は今でも覚えている、楽しかったお仕事の記憶です。

デジタルリモートも今は当たり前の現実ですが、私自身はあまり関心がないままにその実用化への実験のお仕事に立ち会っていたことがとても不思議に思えます。

今年は必要に迫られて zoom も Skype も YouTube も利用するようになり、あの実験のお仕事の恩恵に感謝しています。

ムッシュ黒木の純正律講座 第 65 時限目 平均律普及の思想的背景について(54)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

日本学術会議の任命拒否問題が話題になっている。焦点は、拒否された研究者の資質でもなければ、学問の自由でもなく、任命拒否の説明がきちんとなされてないことだろう。人事に対してきちんとした説明がなければ、関係者に不安が広がり、ついつい上の人間の顔を伺うような社会が出来上がってしまう。このような社会は民主主義とは言えない。

今回任命を拒否されたのは人文系の研究者であった。人文系の研究って何やっているの？ 社会の役に立つの？ 趣味の延長でしょ？ という発言を、特にネット上で目にすることがある。というわけで、今回は文学博士の立場から文学研究とは何をやっているかを説明してみたい。

まず、人文系の研究のみならず自然科学系の研究を含めて、研究といった営みの第一歩は整理と分類であることを言っておきたい。実験をしたり、事象を観察したり、アンケートなどを行ったり、資料を調査したりした結果を、他の研究者が見てわかるように整理し分類するのである。この整理と分類こそが科学・学問の第一歩だと言って良い。物理学であれば物理現象、生物学であれば生き物の生態、気象学であれば大気の状態など、研究対象はそれぞれの学問ごとにことなるが、その対象に対して行っていることは、どの分野であろうと基本的には同じである。文学研究の場合、その対象が文学作品であるだけの話だ。文学作品を科学する、と言うと、何やら機材を使って文学作品を実験にかけ分析しているような感じがするが、何のことはない、様々な資料を整理して分類することが科学的作業の第一歩であり、日常的に多くの研究者が行っていることなのだ。

もちろん、自然科学の場合は実験をしてデーターをとるじゃない、それは数字で示される客観的な値でしょ、文学研究にそういう客観的な結果はあるの、主観的な判断じゃないの？ という声もよく聞く。ここでデーターという語源について述べておこう。この言葉はラテン語の「datum」＝「与えられたもの」から派生している。なお、ラテン語から変化した言語であるフランス語では「与える」という動詞は「donner」といい、これを受動態にして「与えられたもの」という語にすると「donné」になることを言添えておく。ここから分かることは、データーとは実験や観察を通して「与えられた」数値や文言にすぎないということだ。それらを整理・分類してはじめて情報となるのだ。実験や観察によって得られた数値はそれだけでは機能しない。実験や観察を遂行した日時、条件や実行者などが記されて初めて研究のための題材となるのである。実験や観察を行っている瞬間にはただひたすらに数値や文言をメモしているだけだろう。そのような走り書きでは、それを記した本人以外には何を示しているのか理解することは難しい。だからこそ、日時、条件や実行者など必要事項を付け足して誰もが分かるようにしておく必要がある。更に、そうやって作成したノートを必要に応じてすぐに取り出せるようにナンバーリングなどをして分類する必要もある。

かつて、「ストップ細胞事件」が起こった時、何よりもあの小保方氏が非難されたのは実験ノートをしっかり付けていなかったからである。実験をした本人にしかわからないメモ書きを見せられて、ちゃんと実験をしました、と言われても誰も信じようがないのである。アイデアが面白いだけでは研究者とは言えない。それは弦の張り方も知らず調弦もできない人間がプロのギタリストを名乗るのと同じようにちぐはぐでおかなしなことなのである。

なお、フランス語の名詞「donné」には「資料」という意味があることをここで指摘しておきたい。確かに、文学研究では通常実験や観察は行わない。その代わり、文学研究者は資料調査を行う。図書館や資料館などにこもり、必要な資料を探すのだ。資料を調査し、発見したものを整理し分類することが、文学研究者としての第一歩なのである。続きは次回。

作曲家の性格あれこれ

NPO 法人 純正律音楽研究会 初代代表
玉木宏樹遺作

(1) 作曲家の性格論

みなさんはクラシック系の有名な作曲家がどんな性格をしていたか、考えたことがあるでしょうか。頑固で怒りっぽくて女中によく卵を投げつけたベートーヴェン、なんて話は聞いたことがあるでしょう。女性に振られてばかりですが、そんな日常生活の破綻ぶりは、すべて崇高な創造へのバネだった、

という、なんだかいい風にいられていますが、実はすごくイヤ味な性格で、マネージャー役だったシントラー以外に深くつきあった人間はいません。彼は短気で怒りっぽいだけではなく、金銭的にもとてもうるさい性格で、作曲のメモ中にしょっちゅう、コンサートの収支計算ばかりした記録が残っていますが、その計算は間違いだらけで、実は黒字だったのを赤字と思いこんで回りと大ゲンカすることは日常的だったそうです。しかし耳が聴こえない音楽家なんて今までいなかったのですから、それも致し方なかったことかも知れません。しかし、そんな耳のきこえなかった彼はなぜ有名になったのでしょうか。それは若い時の英雄的な存在(今ならさしずめハードロックの大スター)ぶりと聴覚異常という地獄的責め苦とのすごい落差に人々が同情したからだと思われます。今でこそ人類愛の象徴として有名な「第九」も全く評判が悪く、ワグナーによって復活されるまではベートーヴェンの最大の失敗作といわれていました。

ベートーヴェンの素行はいろんな人が述べていますから有名ですが、それ以外の作曲家はどうでしょう。映画「アマデウス」でスカトロ趣味をあばかれたモーツァルトですが、それ以前は天心爛漫で無邪気な神童という扱いが主流でした。その他、バッハに到っては、とても敬虔なクリスチャンの人格者とのイメージが今でも充満しています。

私も作曲家のはしくれですし、他の作曲家もたくさん知っています。その経験から言わせてもらおうと、みんなから尊敬される人格者の作曲家なんて、会ったこともないし、これからもないでしょう。だいたい作曲家というものは恐ろしく自信過剰で高慢チキな存在です。それこそバッハ以前を含め無数の作曲家と作品がありながら、新しい曲を創るなんて、ドンキホーテ以外の何者でもありません。クラシックの作曲家の有名所でたいへんみんなから愛され尊敬されたのはハイドンくらいでしょう。悪妻を持った男は成功するといわれていますが、その典型かも知れません。

作曲家になる性格とか、なった性格に共通するもの、それはあくなき自己主張の私の強さだけであり、暗い、明るい、夢想的、現実的のどれか一方に偏ることはありません。楽天的で社交的で美食家のロッキーニもいれば人の前に立つのが大の苦手で、いつも指揮台の上で卒倒しそうになるほどヒポコンドリアのチャイコフスキーと、それはそれは千差万別です。天下無類のオシャレだったラヴェルもいれば、ビールとステーキの汁でいつも服がテカテカしていたブルックナーと、これも正反対です。おそらくセックス依存症だったと思われるリストもいれば、チャイコフスキーを始めとしたホモも沢山いるのです。

私は精神医でも心理学者でもありませんが、今まで得た情報を整理して有名作曲家の面白い側面を書いてみましょう。

(2) 辛気くさいバッハ(1685～1750)

先ほど書きましたが、大いに誤解を招く「音楽の父」という尊称を受け、俗世の名誉とは無縁に敬虔な信仰生活を送ったと伝えられているバッハですから、あまり素行の悪さを上げつらっている本には会えません。しかしい

ろんな情報を整理すると、その人物像は、とても頑固で短気で怒りっぽく、回りと衝突ばかりくり返していますが、こういうことだってバッハ礼賛者からすれば「自分の意志を貫く信念の人」になってしまうので、私はついて行きません。

バッハは才能あるオルガン名手でしたから若くして宮廷つき教会オルガニストになりますが、即興演奏が長く、不協和音もよく出したので評判がよくなく、上司から「長すぎる」と言われたとき、「これでどうですか」と言って超短く弾き終わったというのですから、すこぶる天の邪鬼。ある時休暇をもらってブクステフーデという当時の超大家のオルガン演奏を遠くまで徒歩で聴きに行き、感激のあまり、長逗留し、休暇をはるかにオーバーして、投獄されます。またオーケストラの指導も任されていましたが、いつも下手で頭に来ていたファゴット吹きが町で会うと女連れで歩いており、それを見たバッハがイチャモンをつけ、抜刀騒ぎを起こしています。

バッハに女性問題なんて、あり得ないと言う人たちに一撃。バッハはあろうことか、教会のオルガン席に女性を座らせ、歌をうたわせたという話があり、教会に許可もなく女性をつれ込んだということで激しい叱責を受けています。この女性が最初の奥さんになった、マリア・バルバラなのですが、私の下司のカングリとしては、隣に座らせた以上のことがあったんだろうと思います。実は昔の芸大の古い校舎の中で、ネンゴロになった男女が見回りの人に見つかり、大問題となりました。しかしその男性はとても才能豊かな、将来性溢れる青年で、教授会はその男性を呼び、「君らは結婚するんだろうな、そうだろう」と言って結婚させた話があったそうです。この話ってバッハの場合と似ていると思いませんか。こんな話を書くとバッハって、なんだかヤンチャな朝青龍と似ていると思いませんか。

バッハはまた、お金に関してもたいへんな儉約家でした。敬虔なクリスチャンにしては、ある年「今年はなんだか死ぬ人が少なく、葬式が少なく、収入が減った」などと手紙を書き残しています。出世欲も強かったのですが人間関係で悉く失敗し、ライプチヒ市の音楽カントールが死んだとき、大チャンスとばかり働きかけましたが、ライプチヒ市側は、最初、当時バッハなど歯牙にもかけない有名人、テレマンと交渉しましたが、ギャラが合わず決裂、次の候補者にも断られて困っていたときに、バッハはライプチヒの市会議員の何人かに賄賂を贈り、なんとかカントールになれた、なんて話もあります。バッハも、結構、ドロドロした人生を送ったんだと思います。

それに比べて同い年のヘンデルは超外交的な性格で、派手な生活を送り、作曲家というよりは、プロデューサーとして大成功しました。

(3) ワーカホリックのチェルニー(1791~1857)

ピアノを習った方なら、必ずチェルニーの30番、40番は御存知だと思います。この30番の意味は、この本は30曲の練習曲があるという意味です。しかし、それをまとめて、作品(op)××として出版されています。よく言われる作品番号はある程度のメドにはなりますが、必ずしも1曲ごとに番号が付いているわけではありません。ショパンの「24の前奏曲」も1曲ずつに

番号が付いているわけではなく、まとめて作品 28 となっているのです。それから作品番号というのはベートーヴェンの最後が op138、を始めとして、殆どの作曲家の作品番号は 150 を越えるのは珍しく、長生きしたサンサーンスが 170、もっと長生きしたライネッケが 290 です。でもこういう人たちは純音楽系ですから、交響曲やピアノピースまでに亘っていますが、そういう純音楽じゃないヨハン・シュトラウスのダンス音楽の場合、op479 にまで到達しています。

作品番号(op)というのは音楽出版社の発刊承認番号ですから、出版社経由で公表されたものにしか番号はつきません。そういう意味ではチェルニーの作品番号は 900 近くになっていて、これはもう異常以外の何物でもないし、ひとつの作品番号で、30 曲や 40 曲という曲がまとめられているのですから、作品番号のない曲も含め、チェルニーの本当の作品数は、全く想像を絶するわけです。

こんなチェルニーは実はベートーヴェンの弟子であり、自分の弟子としてはリストを筆頭にたくさんの有名人がいます。彼はベートーヴェンの支持を受け、「皇帝コンチェルト」の初演もやっています。もちろん彼も子供の時は評判になった神童でしたが、段々人前での演奏から遠ざかり、教師と作曲に没頭しました。ここから彼のワーカホリックが始まります。当時初演されて評判になった他人のオペラの序曲や有名なアリアをすぐにピアノ用、またはヴァイオリンやフルート用に編曲します。今風に言うと「カバー」なんです。当時としては流行のオペラの楽譜上のシングル盤だったんでしょう。

チェルニーの浮いた話は聞いたことがありません。彼は毎日 10 人くらいのレッスンを終えたあと、作曲に没頭しました。その仕事ぶりは、丸テーブルに置いた何枚もの五線紙に次々と書きこみ、アイデアが尽きると過去のアイデア帳から引用したそうです。私自身もかなりの中毒状態ですが、はっきり言ってチェルニーは「ワーカホリック」そのものです。

(4) 忘れっぽいシューベルト(1797～1828)

あの可憐で美しいメロディの数々を残したシューベルトですが、曲調と性格はまるで正反対、葉巻と酒におぼれ、不潔だったようです。身長 156 cm で小肥り、周りからは「ピヤ樽」と呼ばれていました。繊細というか、たいへんな小心者で、人前で何かをするのはとても苦手だったようですから、恋人の噂はありませんが、そのくせ売春宿の常連で、そこで伝染した梅毒がもとで 31 で亡くなりました。死ぬ前は髪の毛は抜け落ちていたそうです。

チェルニーほどではありませんが、やはりワーカホリック的に次々に作品を書いています。とにかく書くスピードは物凄く早かったようです。ベートーヴェンのように推敲はしませんから、次から次へと書きまくっています。彼はけっこうずぼらな所があったようで、約束は平気で破ったそうです。遊ぶのは仲間内だけなのに、その仲間との約束も破っています。

シューベルトの「未完成」交響曲の謎は映画にもなりましたが、未完成になった理由と恋物語の因縁なんて全く何の関係のないことが原因だったようです。以前はある協会の会員にしてもらったことへの謝礼として書かれた

ように言われていましたが、最近のグローブ音楽事典によると、それも違うようです。シューベルトの仲間に、アンゼラム・ヒュッテンブレンナーというお金持ちの作曲家がいましたが、その人から借金し、その返済がわりに、1.2 楽章を送ったのですが、ヒュッテンブレンナーは、そのうち、3.4 楽章もくるだろうと思い、引き出しに抛りこみ、そのままになったようなのです。忘れっぽいシューベルトのことですから、一気に完成させず、もう一度途中から続きを書くのはきっと億劫になり、そのまま忘れてしまったというのが真相のようです。夢を破られた方はお赦し下さい。

(5) セックス依存症？ のリスト(1811～1886)

自分のピアノ演奏によって多くの女性を失神させたリストですが、どれだけ女性にもてたか、という本はたくさんあります。しかし、私はひょっとしたらリストはタイガー・ウッズばりのセックス依存症だったのではないかと考えてなりません、そういう研究書はないのでしょうかね。

(6) 強迫神経症のブルックナー(1824～1896)

ビールとステーキが大好きだったブルックナーですが、常に肉汁をこぼすので服はいつもテカテカしていたとのこと。何でも数を数えないと気が済まないという強迫神経症だったと言われていますが、数えることにかけては私も人後に落ちません。歩いている時はいつも自分の持っているクラシック系の CD(約 3000 枚くらい)の数を思い出して記憶力をチェックしています。また私のブログには、好きな曲を聴いた回数を書きこんだりしていますが、別に自分のことを強迫神経症だと思ったことはありません。

しかしブルックナーは鬱病気質が激しく、自殺願望も持ち、死に対する(死体に対する?)興味を強く持っていたようです。シューベルトやベートーヴェンの墓が移動の際、掘り起こすことを知ったブルックナーはその場で待ちわびていました。何を持っていたのか?ブルックナーは掘り起こされた頭蓋骨にどうしても触りたかったそうです。強い頭痛の発作に悩まされ、強迫神経症の治療も受けています。

弟子すじのマーラーと親しかったのは有名ですが、一人、意外な弟子がいます。それは「愛の喜び」等の作品で有名なクライスラーです。クライスラー自伝によると、音楽院の生徒だったとき、学友と企んで、あるイタズラをしたそうです。それは強力なワグナーファンだったブルックナーに対し、ある犬にワグナーの曲を聴かせてはいじめ、ブルックナーの曲を聴いたら餌をやるという繰り返して犬は到頭、ワグナー大嫌いになりました。そしてある日、ブルックナーの前でその犬がいかにもワグナーが嫌いでブルックナーが好きか、という実験をした、というのですが、クライスラーの自伝ではドリーブの「コッペリアのワルツ」は自分の作曲だなんてウソを平気で書いていますから信用はできませんね。

(7) 人の悪口を言うのが好きだったブラームス(1833～1897)

ブラームスは残された写真から想像すれば、いかにも威厳のある人格者と

いう雰囲気は漂っています。そして大概の本を読んでも、とてもいい人だった、ということが強調され、クララとの関係までプラトニックと決めつけられています。しかし、実像のブラームスは自信家で自己主張の激しい人物で、人の悪口を言うのが好きな、イヤ味な人だったそうです。また、あの地味っぽい作風からすると金銭とは無縁の生活を送ったように思えることでしょうが、彼はあの通俗的なハンガリー舞曲集で大儲けしています。この曲集は、あるヴァイオリニストと演奏旅行に行ったときに採譜した曲と言われていますが、そのヴァイオリニストは自分も関係しているのにと文句をつけた所、ブラームスは裁判を起こして、そのヴァイオリニストの言い分を叩きのめしました。どちらが正しいのかは今では全く分かりませんが。

人の悪口に関しては過去に面白いテレビ番組がありました。確か、大橋巨泉氏の「クイズダービー」じゃなかったのかと思いますが、問題はブラームスに関することでした。決して人のことをけなさないブラームス(なんという！)のところに新人がスコアを持ってきて批評をもらおうとしたところ、箸にも棒にもかからないひどい作品だったので、ブラームスは何とかいい所を探してほめようとした結果、「君の五線紙、とてもいいねえ。どこで買ったの？」と、言った、というのですが、人格者だから相手を傷つけないように、そう言った、などというのはとんでもない話でしょう。曲について何も言わず、五線紙をほめるなんていうのは最大の侮辱じゃないですか。またブラームスの元へは、若い作曲家がよく訪れていましたが、歌曲の作曲家、ヴォルフと、マーラーの親友だったロット、この二人はブラームスの家には入れてもらえず、後に二人とも発狂しています。何とも罪作りですね。

シューマンが発狂する以前にブラームスが訪れてきて、シューマンはいち早くその才能を見抜き、絶賛の紹介記事を書きましたが、その時のブラームスのあまりにも垢抜けない野暮ったさに、クララとシューマンはかげで大笑いしたということですが、すぐにクララとブラームスは愛しあうようになります。クララの最後の子はブラームスの子ではないかという説までありますが、真相は謎のままです。

(8) モーツァルトを上回る神童だった？ サンサーンス(1835～1921)

神童といえばモーツァルトの代名詞のように言われますが、モーツァルトの再来と言われた人、ひょっとしたら、モーツァルトを上回る神童も何人かいたようです。その一人がこのカミーユ・サンサーンスです。2歳半でピアノを習い始め、5歳でモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」のアナリーゼ(曲の解析)をしたくらいのとんでもない天才で、3歳以前に読み書きができ、ラテン語も得意で後には天文学や考古学、占星術に凝り、詩や小説も書いた超多才な人で、長生きしたおかげで、作曲も夥しい数を残しています。しかし日本では「動物の謝肉祭」の中のチェロの名曲「白鳥」ばかりが有名で、他の曲は軽んじられている傾向があります。ひとつには日本のクラシック音楽教育がドイツ偏重、しかも交響曲を重視するあまり、3曲しか交響曲を書かなかったことが原因だと思われま

す。サンサーンスはやはり、神経質で怒りっぽくむら気という、他の作曲家と

同じような所がありますが、ここではそれを追求するのではなく、交響曲の初演にまつわるウラ話を紹介しましょう。サンサーンスの時代、華麗なオペラやバレエは、フランス、イタリアが主流で地味っぽい器楽曲、特に交響曲はドイツのものという棲み分けがはっきりしていて、フランスでは交響曲を書くということはウィーン古典派を学ぶための勉強でしかなかったのです。そんな楽壇に交響曲(No.1 はなんと op2)でデビューを計りましたが、フランス人の新人の交響曲なんて、全く相手にされないことは目に見えて分かっていたので、サンサーンスのよき理解者だった指揮者のセゲルスは、自分の所へ送られてきた無名のドイツ人の交響曲として初演して成功し、後にサンサーンスというフランス人の新人だと発表、グノーやベルリオーズからも絶賛されたのです。こうして交響曲の作曲家としてデビューしたのに結局、生涯に3曲しか書かず、今では、オルガン付きの No.3 しか演奏されません。

サンサーンスには実は、世界で一番最初にやった仕事がありました。それは映画音楽でした。いかにも好奇心旺盛な彼らしい業績でしょう。

(9) 放浪癖の作曲家、アルベニス(1860～1909)

4歳でピアニストのデビューを果たしたアルベニスはやはり神童のひとりでした。そしてモーツァルトと同じように、スペインはおろか、パリにまでコンサート活動をしています。しかしモーツァルトと全く違うのは、ステージパパの存在を嫌悪し、何度も家出をしていることですが、ピアノは弾き続けているので、音楽は好きだったんでしょう。9歳の時の家出はすさまじいもので、行きあたりばつりに汽車に乗り、あちこちでコンサートをやって稼いだお金を山賊に巻き上げられ、仕方なくうちに帰っています。そして12歳のとき、とんでもない放浪に出ます。アンダルシア地方からカディスへ出て、南米のプエルト・リコ行きの客船に忍びこみます。航海中はピアノを弾いて生活していたようです。そして、プエルト・リコから南米にわたり、アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル、キューバと放浪します。しかし、南米にいるらしいとさとした父親に居場所を突きとめられ、ハバナで再会しますが、なぜか父親も賛成して、今度はアメリカにわたり、また放浪生活に戻ります。そして最後の旅はサンフランシスコで終わります。

17歳でスペイン政府から奨学金をもらい、ブリュッセル音楽院に入学して、1等賞をとり、20歳の時リストに会って教えを受けます。そしてこの後はとても落ち着いた生活を送り、すばらしいピアノ曲をたくさん書き残しました。こんな破天荒な青年時代を送った作曲家はアルベニス以外にはない、特筆すべき人物でした。

(10) おしゃれすぎるラヴェル(1875～1937)

「ボレロ」で有名なラヴェルは、150cmくらいの小柄だったのですが、超おしゃれでした。そのサマを見事に描写している千歳八郎氏の「素顔の作曲家たち」のラヴェルの項を引用させてもらいましょう。

女性ヴァイオリニストで、ラヴェルの終生の友人として、つねに彼

の影の形に添うがごとき存在だったジュルダン=モランジュが、その「ラヴェルと私たち」(音楽之友社)のなかで、彼のダンディぶりをいろいろと披露しているが、30歳代のラヴェルは「茶色の上衣、格子縞のズボン、堅く張らせたカラーに細い蝶ネクタイ」といういでたちを見せていたという。またある時は、短いベージュ色のコートを着て、籐のステッキを持ち、手首で折返しのついた手袋をはめていて、まったく社交界の紳士そのものだったということである。アメリカ旅行をした時、わずか二ヶ月だというのに、花嫁の輿入れほどの大荷物をたずさえていったというが、その中味といえば、ワイシャツを50着、バジヤマを20組、それに色とりどりのワイシャツに合わせたズボン吊り、もちろん靴下も靴もあれば、ハンカチもあるといったしだいで、お洒落のラヴェルならではの旅支度だったというわけである。

ある時のこと、発車まぎわに列車に乗り込んできたラヴェルの、遅刻した言訳は、家を出ようと思ったら、上着を変えたのに、それに合わせて靴下をはきかえるのを忘れていたものだからというものであった。きょうは、この洋服を着ようとするから、それに合ったワイシャツを着て、ネクタイを選び、ハンカチも合わせて、靴下から靴へと気をまわすというのが、お洒落の秘訣といえるから、ラヴェルが、そのために列車に乗り遅れそうになったというのもよくわかることになる。それが一つでもチグハグだと、なんとなく落ち着かないのである。

こんなおしゃれのラヴェルも自動車事故が遠因で脳の病気を煩い死んでしまいました。勿体ない事故でした。



CD レビュー 純正茶寮
『Van Halen 』(1978)
純正律音楽研究会理事 黒木朋興



『Van Halen 』(1978)
Van Halen
レーベル : Rhino
ASIN : B00T3YBQ80

今回はロック、しかもハードロックを紹介させていただきたい。本来はこの会報にはそぐわないかもしれないが、一斉を風靡したギタキッズの神様こと、エドワード・ヴァン・ヘイレンの訃報に、どうしても取り上げずにはいられない。

ヴァン・ヘイレンというバンドは、ヴァン・ヘイレン兄弟を中心にアメリカで結成されたハードロックバンドである。ギターを担当するエドワードはライトハンド奏法を開発するなど、ロックギターの発展に大いに貢献した。しかし、彼の功績は単にこの新奏法を編み出したからというわけではない。ヘヴィメタルの巨匠オジー・オズボーンのバンドで初代ギターを担当したランディ・ローズと共に、ともすれば単純すぎるきらいのあったロックギターを音楽的に発展させることに貢献したのだ。ざっくり言えば、それまでほぼペンタトニックスケール一辺倒だったロックギターの世界に、ランディはクラシックの、そしてエドワードはジャズのイディオムを持ち込んだと要約できる。

今改めてこのファーストアルバムを聴いてみると、当時はまだジャズからの影響は少ないが、それでもエドワードの非凡さを改めて思い知らされる。

フレットを平均律に打ってあるギターはヴァイオリンと違って純正律に適した楽器でない。ただ、ギターを弦の倍音でチューニングすると5度と4度は純正に、そして2弦と3弦の間の3度はピュタゴラス3度となり不協和音となる。

ヘヴィメタルやハードロックを中心に多くのロックギタリストは3度を抜いた1度5度8度のパワーコードを多用する。言ってしまうえば、パワーコードの平行移動である。このパワーコードで組み立てられたリフレインはクラシックの世界では平行5度として長い間禁止事項だった。しかし、これはロックギタリストが平均律の濁った3度を嫌った結果なのではないかと常々考えている。

ヘヴィメタルやハードロックではギターを歪ませるディストーションサウンドが主流だ。音を歪ませると倍音が強調される。となると不協和音は一層濁り、協和音は鮮烈な響きとなる。このアルバムに収録されているキンクスの楽曲をカバーをした楽曲「ユー・リアリー・ガット・ミー」においてパワーコードによる切れ味の鋭いリフレインを聴くことができる。

彼らのデビュー作のこのアルバムの時点において、エドワードは単に楽音を正しく出すのみならず、エレキギターのさまざまな可能性を追求していることが見て取れる。ハーモニクス奏法、ピッキングハーモニック、アーム奏法などを始め空ピックや弦を擦る音などを多用し、ギターのメロディー楽器としての可能性と同時にリズム楽器として可能性を存分に追求している。

凡庸に言うならば、楽音だけではなくノイズを楽曲に取り込んだと言うことになるかも知れない。しかしことはそう単純ではない。先ほども述べたように、ディストーションは倍音を増幅させる。ということは、弦を無駄に擦って楽音以外の音を醸し出すということは単にノイズを出しているのではなく、倍音を増幅させている以上それは純正律の試みだとも言えるのだ。

微分音と言った場合、平均律にはない音という意味でノイズを連想する人が多いが、純正律の音程も微分音に含まれることを思い出しておきたい。エドワードは単にリズム楽器としてのギターのノージーな音の使い方だけではなく、倍音の響きを利用した和声楽器としての面白さを追求していたとは言えないだろうか？ もちろん、彼が理論的に計算してこれらの追究していたわけではないだろう。しかし、感覚的に様々な音色を感じ取り新たな可能性を追究していたからこそ、彼はギターキッズの神様の名に相応しいように思うのだ。

「プロテスタンティズムの倫理 と資本主義の精神」を読む

純正律音楽研究会 正会員
弁護士 齋藤昌男

第1. 序論

1. 何度挑戦しても、途中で挫折してしまう本があります。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（以下略して「プロ倫」という）は、筆者にとってはその様な本であります。丸山真男先生に言わせると、社会科学を志す者の必読書であると言っています。確かに大学においては、社会学は言

うに及ばず、宗教学や経済学の講義でも教授がしばしばこの本の事を言及します。そこで筆者は、何度かこの書物に挑戦しました。しかし、なかなか最後まで読み切れません。

2. 理由を考えて見ると、たかが400ページを越える岩波文庫一冊であります。本文と注が半々と思われる程、注の多い本であり、注は事例をこと細かく書いています。そして事例は、ドイツ、オランダ、イギリス、アメリカを中心とした文字通り人々の生活を中心とした事例を書いています。

原文はドイツ語でかなり難しい文章らしいのですが、岩波文庫の訳者は大塚久雄先生で、これ以上の訳者は望めないかもしれませんが、原文が長たらく難しいためか、相当難解な訳文であります。この為になかなか最後まで読み切れませんでした。

3. なぜこんなに引用が多いかについて、大塚久雄先生は、訳者解説のところで次の様に言っています（岩波文庫、412ページ）。

「ヴェーバーの立場は多元論ですから、話の筋が非常に錯雑してきます。しかし、その錯雑しているなかで、重要な問題に関してその因果関連の筋道をはっきりさせていかねばならない。そこで、脇道にそれるようなところは、みな余論とか、あるいは注のなかに追いこんでしまう。そういうふうにして注が非常に増えてしまうわけです。が、同時にまた、注のなかで非常に大切な問題が論じられることにもなります。」

4. ところがさる日、本屋へ立ち寄ったら、「解説ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（講談社選書メチエ）」という本が目にとまりました。筆者は橋本努北大教授です。コロナウイルスで緊急事態宣言（2020年4月7日が7都道府県の宣言）が発せられ自宅にいる事が多くなったので、また読み出し、今度は最後まで読みました。

5. ところが本年5月になって、面白いことが起りました。表記の違い以外に同名の新書が同時に出版されたのです。書店には今野元『マックス・ヴェーバー』（岩波新書）と野口雅弘『マックス・ウェーバー』（中公新書）が並んでいます。マックス・ウェーバーが2020年6月14日に没後100年となるそうです。

とはいえ書名（ヴェーバーはドイツ語読み）と発売時期こそ重なったものの内容的には重複は全くありません。

第2. 論点

『プロ倫』を簡潔に説明することは、筆者には不可能なことなので、扱っている論点をいくつか説明することにします。

1. 「宗教が近代化を促進する」という逆説

熱心な信仰生活に打ち込む人々が近代化を推進し、その結果、多かれ少なかれ世俗的近代的社会が出来るとマックス・ウェーバーは主張します。即ち、宗教自身が近代化の推進役になり、これが西洋社会で起ったのであると、主張しています。近代化とともに宗教は過去のものとなるという考え方とは、全く逆の立場となります。

2. 予定説

西洋で他の地域より早く近代化が進んだ理由は何なのか。ウェーバーは、

西洋で近代化が進んだ原因は、プロテスタントのカルヴァン派の影響が大きいとしています。事実、カルヴァン派が強いアメリカ、オランダ、イギリスなどでは、近代化とその帰結としての資本主義化が早い段階で進みました。

宗教改革者のジャン・カルヴァン（1509～1564）は、人間が死後、天国へ行けるか地獄に落ちるかは予めすべて神によって定められており、然も、その神の意思を人間は絶対に知ることが出来ないと説きました。これを「予定説」といいます。その状況下では、職業労働に専心し、自分は救われているとの確証を得たいとの態度が広がりました。そして自分の仕事に集中する合理的精神が育ちました。そして真面目に働く生活態度は必然的に禁欲的なものとなり、蓄積された富が投資に向けられ、資本主義が発達したと言っています。

3. 天職 (Beruf)

マルティン・ルターが聖書のドイツ語翻訳で用いたベルーフ (Beruf) の概念には、世俗の世界で生計を立てるための職業という意味と、「神から与えられた使命」という、いわば天職の意味の両方があります。後者の意味は、Beruf の動詞形 rufen (呼ぶ) にかかわってきます。神によって呼ばれた、即ち「召命」されたもの、というのがこの言葉の含意です。この場合のベルーフの英訳は calling です。

この点につき、『プロ倫』そのものから引用すると次の様になります (岩波文庫 94 ページ)。

『合理主義』は一つの歴史的な概念であり、そのなかに無数の矛盾を包含しているのであって、われわれの究明すべき点は、過去および現在において資本主義文化のもっとも特徴的な構成要素となっている》Beruf 《「天職」思想と――前にもみたとおり純粋に幸福主義的な利己心の立場からすればはなは

だ非合理的な――職業労働への献身とを生み出すに至った、あの『合理的』な思考と生活の具体的形態は、いったい、どんな精神的系譜に連なるものだったのか、という問題でなければならない。それも、この場合、とくにわれわれ

の興味を惹くのは、この》Beruf 《「天職」概念のうちに、(すべての) Beruf

《「天職」概念の場合と同じように) 存在する、この非合理的要素はどこからきたのか、ということなのだ。」

4. 「資本主義の精神」とは何か。

大塚久雄先生の訳者解説から引用してみよう。

(1) 岩波文庫 373 ページ

「近世初期の西ヨーロッパにおいて資本主義経済が勃興してくる過程で、その動きを人々の心の内側から推し進めていった心理的起動力、あるいは精神、それを通常『資本主義精神』と呼んでいる。」

(2) 岩波文庫 387 ページ

「勤労とか節約とか、そういう個々の徳性ならばなにもピュウリタニズムだけではなく、どこにでも見られる。日本の二宮尊徳の思想にだって

立派にあるではありませんか。そうした徳性がただちにヴェーバーのいう『資本主義の精神』ではないのです。そうではなくて、そうした個々のさまざまな徳性を一つの統一した行動のシステムにまでまとめ上げているようなエートス、倫理的雰囲気、あるいは思想的雰囲気、そうしたエートスこそが『資本主義の精神』なのであって、」と言っています。

(3) エートス (ethos) とは、ある個人や社会の持つ精神・気風・倫理観・風潮などを言います。

(4) 訳者解説 390 ページ

「ところで、ヴェーバーのばあい、『資本主義の精神』の意味内容についてはもう一つ注意しておかねばならぬことがあります。それは、その担い手のなかに資本家だけではなくて、労働者もまた含まれているということです。もうすこし詳しく言うと、中産的生産者層の内面に『資本主義の精神』が宿ったばあい、そのうちのある人々は経営を拡大して近代的な産業経営者となり、取り残された他の人々は経営内の規律にみずから進んで服することができるような近代的な労働者となっていく、そういう両つの方向へと人々を内面から推し進めるということなのです。」

(5) さて『プロ倫』の本文において興味を引いた事例を以下2つだけ挙げておきます。

岩波文庫 35 ページ

「ポーランドの少女は、生地ではどんなに有利な金もうけの機会をあたえても伝統主義の惰性から引き離すことはできないのに、その同じ少女が出稼ぎ女としてザクセン地方の見知らぬ土地で労働を始めると、まったく別人のように過度の搾取にたえるのだ。イタリアの出稼ぎ労働者についても、これと同じ現象が見られる。」

(6) 岩波文庫 45 ページ

『資本主義』は中国にも、インドにも、バビロンにも、また古代にも中世にも存在した。しかし、後に見るように、そうした『資本主義』にはいま述べたような独自のエートスが欠けていたのだ。」

5. 確認思想

マックス・ウェーバーという人は、日本のアカデミズムのなかで、依然として大変な影響力をもっている人のようであります。本年は、没後100年とは言え、2020年7月末に、また新しい本が現われました。株式会社現代書館発行、荒川敏彦著の「働く喜び」の喪失、『いま読む名著ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を読み直す』です。

あくまで筆者の感想であります。この本の特徴は「確認思想」ということを持ち出して、「天職思想」と「予定説」の三者の連関性を論じています。以下引用します。

(1) 荒川敏彦著、前掲書108ページ 及び109ページ

「予定説が来世への不安をかき立てたとき、不安を解消する手段が示されれば、人びとは一気にその方向に向かうだろう。大きな役割を果たしたのが、『救いの確かさ』(certitudo salutis) を求める心理状況のな

かで、行為によってそれを『確証』(Bewährung)できるとする思想の形成であった。」

(2) 荒川敏彦著、前掲書114ページ

「予定説は人を孤独にする。その孤独を解消する方途として、救われていることは確かめられるという確証思想が発展をとげる。するとそこから自分だけでなく他者についても、選ばれているか否かを監視する『目』がつくり出されていくだろう。」

(3) 荒川敏彦著、前掲書115ページ

「これら三者が一つへと連結した希有な事態は、人間をどのような存在へと再生させていっただろう。毛利の三本の矢ではないが、ベルーフ思想だけでなく、予定説だけでもなく、確証思想も含めて果たされた三者連関は、その後の世界史を変えていくほどの力を宿した。」

第3. 総括

1. ウェーバーは『プロ倫』最後の方で、次の様に書いています(岩波文庫366ページ)。

「営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果、スポーツの性格をおびることさえ稀ではない。将来この鉄の檻の中に住むものは誰なのか、そして、この巨大な発展が終わるとき、まったく新しい預言者たちが現われるのか、あるいはかつての思想や理想の力強い復活が起こるのか、それとも—そのどちらでもなくて—一種の異常な尊大さで粉飾された機械的化石と化することになるのか、まだ誰にも分からない。それはそれとして、こうした文化発展の最後に現われる『末人たち』letzte Menschenにとっては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。

『精神のない専門人、心情のない享樂人。この無ニヒツのものは、人間性のかつて達したことのない段階にまですでに登りつめた、と自惚れるだろう』と。

2. さて上記に書かれている訳語「鉄の檻」の原語は ein Stahlhartes Gehäuse であります。言語のゲボイゼ (gehäuse) は、枠、外枠、住まい、殻、箱、カプセルとも訳すことも出来ます。いずれにしても、私達はこの様な枠組のなかで生きているのです。今回の世界的なウイルス感染は、リスクと不安のあふれている現代社会の脆弱な部分を炙り出しています。新型コロナウイルスと共存しなければならない時代となりました。好む好まざるとに拘らず、IT化は加速的に進んでいます。しかし、「精神のない専門人。心情のない享樂人」にはなりたくないものです。

以上

2020年10月4日脱稿

今後のスケジュール

デュオで楽しむヴァイオリン【癒しの音楽コンサート】

2020年12月26日(土曜日)14時開演

開場：山崎製パン 飯島藤十郎社主記念 LLC ホール

出演：水野佐知香(Vn)、荒井章乃(Vn)、三宅美子(Hp)、森夕希子(Piano)

【癒しの音楽コンサート】

2021年3月6日(土曜日)14時開演

会場：山崎製パン 飯島藤十郎社主記念 LLC ホール



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp <http://just-int.com/>

2020年11月6日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫

***純正律音楽研究会 YouTube チャンネルを開設しました。**

コンサートや CD 紹介の映像が当会ホームページからご覧いただけます。

<http://just-int.com/>